

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

太刀川英輔 デザインストラテジスト
Eisuke Tachikawa / Design Strategist



CREATOR INTERVIEW No. 150

太刀川英輔 Eisuke Tachikawa

未来の希望につながるプロジェクトを手掛けるデザイナー。SDGs、再生可能エネルギー、地域活性などを扱う数々のプロジェクトで総合的な戦略や事業構想を描く。

またデザイナーとして、インダストリアルデザイン、グラフィック、建築などで高い表現力を発揮する。これまでにグッドデザイン賞金賞、アジアデザイン賞大賞、ドイツデザイン賞金賞他、国内外を問わず100以上のデザイン賞を受賞。グッドデザイン賞、ACC賞、DFAA (Design for Asia Awards)、WAF (World Architecture Festival) 等の審査委員を歴任。日本で最も歴史ある全国デザイン団体JIDAの理事長を歴代最年少で務める。産学官の様々なセクターの中に変革者を育むため、生物の進化という自然現象から創造性の本質を学ぶ「進化思考」を提唱し、日本を代表する学術賞「山本七平賞」を受賞。創造的な教育の普及を奨めている。主なプロジェクトに、OLIVE、東京防災、PANDAID、山本山、横浜DeNAベイスターズ、YOXO、2025大阪・関西万博日本館基本構想など。

著書に『進化思考』（海士の風、2021年）『デザインと革新』（パイ インターナショナル、2016年）がある。

No

150

太刀川英輔 デザインストラテジスト

EISUKE TACHIKAWA / Design Strategist

創造性を磨いて、みんなで社会課題に取り組む。



クリエイターインタビュー

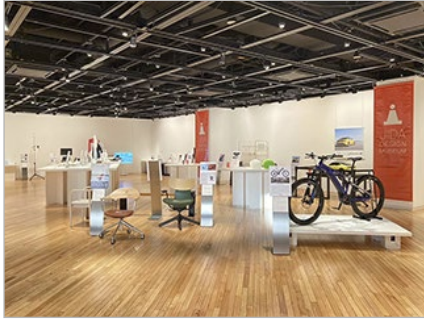
「気候変動の“緩和”と“適応”をデザインする」

published_2023.08.30 / photo_tada / text_akiko miyaura

災害時の情報サイト「OLIVE」やハンドブック「東京防災」などを手がけ、建築やプロダクト、グラフィックなど多彩な分野で社会課題を解決するデザインに取り組む NOSIGNER 代表、太刀川英輔さん。2021年には日本でもっとも長い歴史を持つ全国デザイン団体、JIDA（日本インダストリアルデザイン協会）理事長に史上最年少で就任し、また日本では34年ぶりに開催される『世界デザイン会議 東京 2023』にて5人の実行委員のひとりを務めています。今回は、現在進行形で解決策の模索が続く環境問題に対して、太刀川さんが関わるプロジェクトや、提唱する「進化思考」がどのような変化を生み出すのか、今一人ひとりが取り組むべきことは何か、お話を伺いました。

「人間社会だけが社会である」という幻想が崩れた今。

僕が2021年に理事長に就任したJIDA（日本インダストリアルデザイン協会）が、WDO（世界デザイン機構）の発足メンバーだったご縁もあり、今年10月に日本で行われる『世界デザイン会議 東京 2023』で実行委員を務めることになりました。実は、日本でこの会議が開催されるのは実に34年ぶり。会議期間中は、世界中からデザイン関係者が集まり、社会が抱える課題にデザインがどうコミットできるかを、いろいろな観点から考える貴重な機会になります。



JIDA

JIDA(公益社団法人日本インダストリアルデザイン協会)は、「Japan Industrial Design Association」の略で、モノ全般のデザインを扱う、日本でもっとも歴史あるデザインの団体。2021年より「日本インダストリアルデザイナー協会」から「日本インダストリアルデザイン協会」に名称を変更。これについて、太刀川さんは「肩書にかかわらず、工夫してつくる人、みんながデザイナー。そういう思いを込めて、名称が変更されたんです」と話す。



『世界デザイン会議 東京2023』

2023年10月27日(金)～10月29日(日)の3日間、千葉大学デザイン・リサーチ・インスティテュートと六本木アカデミー・ヒルズで、さまざまなフォーラムやカンファレンスなどが行われる。デザインにまつわるテーマに基づいて、各界を代表する人々がスピーカーとして登壇し、最先端のトピックスについて協議。日本では1973年の京都、1989年の名古屋に続いて3度目の開催で、実に34年ぶりの招致となる。

今回の世界デザイン会議では、「Humanity」「Planet」「Technology」「Policy」という4テーマを掲げています。そのテーマ設定にも関わり、僕自身も Planet の分科会で登壇することになっています。4つともデザインや社会にとって重要なテーマばかりですけど、個人的に特に思い入れが深いのは、地球環境問題に対してデザインは何ができるのかを問う「Planet」でした。

そもそもローマクラブから「成長の限界」のレポートが出て、持続可能性の議論が運動として叫ばれてから50年ほど経ちますが、社会の実態はほとんど変わっていません。むしろ気候変動が進み、災害が激増し、生物多様性が急速に失われているのが現実です。災害が頻発すると、経済的ダメージだけでも計り知れないほど大きい。例えば、先日のパキスタンの水害では約4兆円もの被害があったと言われています。また生態系が破壊されてしまうこともコストに直結します。ミツバチがいなくなると、おおよそ年間20兆円の価値が失われる、という生態系サービスの試算もある。あるいはオオカミがいなくなったことで鹿の獣害被害が広がっているとか、人間社会も生態系に頼っているので、あらゆる影響を受けています。平たく言うと、めちゃくちゃお金がかかるし、取り返しがつかないんですよね。今では世界経済フォーラムでも、最大の長期リスクのTOP2を気候変動の話が独占するほど、状況は深刻です。

そもそも、僕たちは“人間社会だけが社会である”という幻想をつくりあげて、生きてきてしまった。例えば、貨幣が流通できるところまでが社会だという人間の幻想があります。でも、人間社会では貨幣として扱われない空気や水にも価値があるし、山を切り崩して出た土砂が生態系にとって無価値であるわけがないし、それを頼っていた生物は間違いなくいる。にもかかわらず、当然ですが実際には、山や生物には対価を払っていません。「クマさん、あなたのおうちを奪ってしまうから、これを差しあげます」とはなっていませんよね。所有している土地では法の範囲で何をやってもいい、ということになってしまっています。結果、生態系が崩れ、さまざまな課題が浮き彫りとなる中、「持続不可能」が叫ばれ、約6,600万年ぶりの大量絶滅を目の当たりにしている。そして、現在ようやく、「人間社会だけが社会、というのは幻想だった」と露わになっているわけです。



成長の限界

マサチューセッツ工科大学のデニス・メドウズを中心とした国際チームが取りまとめた研究で、1972年にローマクラブによって発表された。人口増加や環境汚染などが続けば、地球の資源は枯渇していき、100年以内に地球上の成長は限界に達すると予測し、世界に警鐘を鳴らした。50年後に当たる2022年には、ローマクラブより新たなレポートが発表された。

未来を守るためには、気候変動の“緩和”と“適応”が不可欠。

地球の生態系のことを考えるとき、難しいのは、関係する相手が口をきいてくれないことなんです。「キリンさん、何を考えていますか？」と意見を請えない。だからこそ、人間がよくよく考えないといけない。また最近特に話題になる気候変動は我々の大きなテーマですが、基本的な戦略は気候変動を“緩和”すること（Mitigation）と、気候変動に“適応”すること（Adaptation）が国際的にコンセンサスになっています。相手に意見を聞けないならば、こんなふうに生態系の立場で何を人類がやればいいのかを定義することが重要になります。

“適応”と“緩和”。そのうち“緩和”という考え方はシンプルです。今、「二酸化炭素を減らしましょう」、「サーキュラーエコノミーを進めましょう」と言っているのが、“緩和”の部分。グリーンハウスガス（GHG）により気候変動が加速して、100年後には気温が約4度上昇するシナリオが予測されています。それに伴い、かなりの生物の多様性が失われるとともに、人間社会も大きな傷を負うことになるはずですが、100年に1度の台風、過去最大級の豪雨と言われる災害が現に頻繁に起こっていますけど、これが毎年のようにやってきたら大変ですよ。だから、少しでもリスクを下げるために、今できるだけ GHG を下げて“緩和”を進める必要がある。これが気候変動の緩和の考え方です。

その一方で、“適応”も重要。たとえ気温の上昇幅をある程度抑えられたとしても、現実的にダメージゼロとはいかない。気候はもう変わってしまうのだとすると、より気候災害に強靱な街をつくらないといけないし、あらゆる変化の中で人々の生活を安定させないといけない。そうやって、変わってしまう気候に社会を合わせよう、というのが気候変動への適応というコンセプトです。着る洋服や、食べるものや、あらゆるものが適応の問題になるし、新興国の開発のあり方についても、先進国を真似するような形ではなく、根本から考え直す必要があると思います。ただ、これから東京を適応に向けて開発し直すのは相当大変なこと。今あるものがある種、騙し騙し少しずつ適応させていく。でも、服も食もエネルギーも、社会のあらゆるものが気候変動の適応に関わってしまうので、この適応という考え方は緩和のようにシンプルではありません。だから、シンプルに理解できるものにしたい。

社会が抱える課題に、デザインはよく効く。

僕の立ち上げた NOSIGNER は、未来の役に立つことしかやらないと決めて活動を続けてきたデザインファームですが、僕らがこれまで手掛けたプロジェクトも、気づけばこの“緩和”と“適応”に関わるものが増えていきました。もっと言えば、このふたつこそが 21 世紀初頭におけるデザインのもっとも重要なテーマだとも考えています。新しく社会が抱える問題には新しいカタチの方法が試されるべきだし、そこにデザインはめっちゃくちゃ効くはずだからです。

実際、僕たちが“緩和”としてやっていることを紹介してみると、「まち未来製作所」という再生可能エネルギーの流通会社の経営やデザインに関わっています。この会社では「e.CYCLE」という再エネ流通サービスを提供していて、地方で発電した再生可能エネルギーをなるべく地域内で循環させつつ、余った再エネを都市に供給する仕組みをつくっています。これによって、都市では平均 13%ほど電気代が下がるんですね。そこで売上の 1%程度を「まち未来製作所」の手数料としていただき、手数料のうちのほとんどにあたる 4分の3を地元のために使う基金として積み立てている。わずかな割合ですが、合計すると巨額の地域活性化資金が生まれます。それが地域の未来にとっての大切な財源になっているんです。このサービスは急速に広がっていて、現在は 300GWh (300 億 kWh)、今年中には約 1 TWh (1000 億 kWh) もの規模の再エネが流通される見込みです。



まち未来製作所

ローカルビジネスを通して地域活性化を実現するプロデュース集団。自治体や地場企業などとともに、地域電力の立上支援、再生可能エネルギーの流通モデル構築、空き家を活用した地域交流拠点創出など、持続可能な社会への貢献を目指す。太刀川さんは、取締役兼 CDOを務める。

太刀川英輔 デザインストラテジスト

EISUKE TACHIKAWA / Design Strategist



published_2023.08.30 / photo_tada / text_akiko miyaura

一方、“適応”として取り組んでいるのが、持続可能な都市を考える「ADAPTMENT」というプロジェクトです。ADAPTMENT は生物の身体構造や行動の適応進化を、気候変動の適応策に応用して、本質的な適応策をシンプルに理解するためのフレームワークです。つまり、街をどう開発すると、よりレジリエントな都市になるかを考え直した結果、「生物の適応をモデルに、都市をデザインすればいいんじゃないか」という考えに行き着いたんです。



ADAPTMENT

発起人の太刀川さんを中心に、気候変動適応のための専門家のワーキンググループとして2022年に発足。環境省の応援によって、気候学、動物生態学、開発学、防災、デザインなど、さまざまな領域の日本の専門家らが、気候変動適応のためのデザイン戦略を取りまとめ、持続可能な開発コンセプトの実践に向けて国際的な発信をしている。「2023年は、台風の大災害を経験したフィリピンのタクロバン、観光開発を計画中のインドネシアのラブアン・バジョの適応策を提案するのが目標」と太刀川さん。

都市をレジリエントにする方法は、人間の体の構造から学ぶことができる。

まず都市の気候への適応を考える上で重要なのは、どのように土地利用を定義するかです。我々はこの流域を単位とする考え方をベースにしています。流域とは、雨が降ったときに川になり水が流れる地形の単位。それが気候災害の単位であり、生態系の単位でもあります。仲良くさせていただいている進化生態学者の岸由二先生が、生涯をかけて、流域思考に基づくプランニングを鶴見川と小網代で実践されていますが、彼が ADAPTMENT プロジェクトにおいて、流域をどう扱うかのアドバイスをしてくれています。こうして流域観点で土地利用の方策を立てたら、どのような戦略が適応に有効なのかを、生物の身体と行動の適応進化をヒントに考えて実装していく。それが ADAPTMENT プロジェクトです。

例えば僕らの身体は状況に適応するように進化し、さまざまな機能が体を保つためにつくられています。骨は頑強さのために、筋肉は弾力性のために、血管は循環のために備わっていて、細胞は回復し、神経は知覚する。これをコンクリートの建築で言い換えると、建築基準法に従って頑強な建物をつくること。それだけだと壊れやすいので免震構造でしなやかさを付加することであり、自然修復するコンクリートを使うことであり、強度が弱まる前に知ることができれば、安全性は上がりますよね。そう考えると、身体の構造は、都市のハードウェアの構造と似ている気がしませんか？ つまり、都市をレジリエントにする方法は生物から学べるよね、という話なんです。こんなふうに、さまざまな形で都市のハードウェアに取り入れるべきさまざまなコンセプトを6種類に分けて地域に届けていきます。

また、生物は身体だけじゃなく、行動も進化してきました。危ないことがあったら逃げる、とか、群れで協力する、とかは彼らの生活を安定させていますよね。こうした行動も、人間社会の防災行動にそっくりなんです。そこでこうした内容から6種類のレジリエンスを高める行動を抽出して、それにまつわる防災の考え方を集めています。僕も「東京防災」をデザインしたり、防災のプロジェクトをさまざまに行ってきましたが、防災のための行動にはさまざまなものがあります。かつての災害を記録しておくことも大切ですし、これから起こる危険を予測できるようになること、いざというときに瞬時に逃げられること、そして、地域の中で情報伝達をして協力できるようになることも重要。これらは程度の差こそあれ、さまざまな動物が獲得してきた行動の適応進化にも近い行動が見られます。こんなふうに土地利用を流域生態系に合わせ、個別の方法は生物の適応・進化を参考にすれば、もっとレジリエントな都市をつくれると考えるのが ADAPTMENT です。



東京防災

約900万部を発行し、660万を超える東京都の全世帯に防災本を配る、日本の行政広報物史上最大級の出版プロジェクト。太刀川さん率いるNOSIGNERがデザインと編集を務めた。この原型は、東日本大震災後に出版された「OLIVEいのちを守るハンドブック」。楽しみながら災害のリアルを感じられることを目指した。



太刀川英輔 デザインストラテジスト
EISUKE TACHIKAWA / Design Strategist

published_2023.08.30 / photo_tada / text_akiko miyaura

未知の社会問題に対峙する状況は、裏返せば希望になる。

このように適応の観点の中にも、都市づくりという身体のようなハードウェア面と、市民の行動というソフトウェア面があって、今までは両方を含めて全体をうまく説明するロジックが世界的に見てもなかった。でも、生物の体と行動の例え話で話せば、子どもにもすごく分かりやすくなります。この先は、専門家だけが難しい話をしていても立ちゆかない。でも、「我々の体や行動は、安全を高めるように進化していますよね。それを街と重ねればいいですよ」と言われれば、少し分かるような気になりませんか？ 僕が「ADAPTMENT」を始めたのは、そういった発信や活動をしたかったからなんです。

そもその話になりますが、なぜ今までこうした生態系の単位で都市開発が行われてこなかったのか。理由は単純で、現在の街をつくっていた頃には気候変動が存在しておらず、また土地は個人の持ち物として購入できるものになってしまったから、多くの人が流域単位では都市を考えられないのです。でも、これほど気候災害が増えている状況を我々が経験するのは、人類史上初めてのこと。今年の夏は、この10万年でもっとも暑い夏だそうなんです。10万年前にホモ・サピエンスはいたけれど、そこには言語すら存在しなかった。つまり我々は、誰も知らない、経験していないことに向き合っ、変えていかなきゃならないんですよね。でも裏を返せば、もし僕たちが創造的であれば、面白い状況だと思っています。今、東京で生まれている課題は、世界のあらゆる都市の課題になる。だから、自分たちの街から、ほんのわずかでも先んじて何かできれば、世界に希望や道筋を与えることができる。そんな時代に僕たちは生きています。

個の豊かさを優先するほど本質は見えなくなっていく。

社会が抱えている課題は多々ありますが、解決のために挑戦できることは、ありすぎるくらいあると僕は思っています。例えば、僕が推進しているプロジェクト「ADAPTMENT」では、都市を気候変動に適応させるためのコンセプトをつくっています。言葉で言うと難しそうですが、こんなテーマにも手元でできる事はいくらでもあるんです。

本プロジェクトでは都市を流域圏で考えますが、誰もが流域に住んでいるのに、意外とその単位を意識している人って少ないんですよ。災害も生態系の破壊流域単位で起こるものなので、例えば六本木がどの水系に属し、どんな流域圏に位置するのかを市民が知ることは大事。すると避難経路が見えてきたり、あるいは六本木に住んでいる人たちが本当に守るべき自然がその上流にあることに気づくでしょう。

流域圏が分かれば、六本木をレジリエントにするための施策として、支えてくれている上流域の生態系を守ることや貯水池をつくることに投資や寄付をしたり、税金をリターンする仕組みをつくったりすることもできるはず。こういう都市の中心と上流の街の関係性って意外と盲点で、あまり語られていないんですよ。昔は「魚つき林」といって、漁師が漁場の上流や河口周辺の森を守ることが当たり前に行われていましたけど、今は安全性を担保してくれる地域に還元するという思想がなくなっている。個が豊かになることを優先する時代になったばかりに、搾取構造に自身が気づいてない人も少なくないと感じます。

インスタレーションやリアルな体験を防災につなげる。

一般の人がすぐにできることでいえば、以前、東京ミッドタウンで、「六本木打ち水大作戦」を開催されていたじゃないですか。ああいった取り組みは、気候変動の適応策としてもいいなと思います。あるいは東京ミッドタウンには芝生広場があって、隣接する檜町公園には池もある。それらは、きっと地域の保水力に寄与しているはずなんです。森や公園や池は社会のバケツみたいなもので、持っているバケツの数が多いほど水害が起こりづらくなる。その事実を体感できるインスタレーションや、雨のときにどれくらい土に水分が吸収されているかが分かる展示をすると、理解が深まるかもしれないですね。

そういえば以前、NHKの番組でクリエイティブな防災訓練を、大学生になった東日本大震災の被災者の子どもたちと一緒にやったことがあります。その中に水害時にどこまで水が迫ってくるか、街中に波線を引いて可視化するという企画がありました。他にも、5リットルの水が入った水筒を渡して、どこまで生活できるかを検証する「Know No Water」という防災訓練にも挑戦しました。手を洗うときに水を何 cc 使うのかとか、どんなことに水が必要なのかを体験できるので、万が一のときに手元にある水で何ができるかを想像しやすい。防災訓練って面倒なイメージがありますが、そういう体験型の“大人の防災訓練”なら、楽しみながら知識を得られていいんじゃないかと思います。

いいプロジェクトとは、未来にとって大事なテーマを見出し扱うこと。

こんな調子で今はデザインストラテジストとして、NOSIGNER というデザイン会社で社会や未来にいい変化をもたらすイノベーションを理念に活動していますが、もともとは大学で建築を学んでいました。大学院に在学中、隈研吾さんの研究室で地域再生とかローカルなことに触れるようになったのですが、振り返るとそれ以前にも、今の活動につながる種があったんですよ。

高校時代、考えてみればバイト先が「ナチュラルハーモニープランツ」という伝説的なオーガニックショップだったんです。倉庫一棟を改装した店内にライフスタイルショップも、サーフィンショップも、オーガニックレストランも、オーガニックバーも入っている、かなりエッジの効いた店でした。そこで働くおじさんたちが、「ガイア理論は大人の常識だ」「ゲーリー・スナイダーくらいは知っておけ」と熱く語ってくるわけですよ（笑）。当時の僕は、社会にはそういう大人がいるのが当たり前だと思っていたし、そんな感覚が染みついたまま、建築の世界へ足を踏み入れました。



ガイア理論

1960年代、イギリスの生態学者のジェームズ・ラブロックが提唱。地球をひとつの生命体と捉え、自己調節機能が備わっているとする説。日本では1984年に『地球生命圏—ガイアの科学』（工作舎）が出版され、ガイア理論の基盤となる思想が紹介された。



ゲーリー・スナイダー

アメリカの詩人。アレン・ギンズバーグやジャック・ケルアックといったビート・ジェネレーションの1人として知られる。自然科学の系譜に位置付けられ、京都に10年以上滞在し、禅を学ぶなど日本との関係も深い。

実際、建築自体はすごく面白かったのですが、「目前にある世界の課題に対してデザインする」という空気が当時の僕には希薄に感じられて、そこで一度立ち止まることになった。そのとき、純粋に思ったのが、いいデザインがしたいということでした。いいデザインはモノがいいだけでなく、プロジェクト自体がいいに決まっている。じゃあ、いいプロジェクトって何かと考えたとき、「未来にとって大事なテーマを、ちゃんと見出して扱うこと」だと感じたんです。

もっと言えば、いいプロジェクトをつくるには、「なぜ必要なのか」という Why から始めないといけない。ただ、どうしても大きな仕事だと分業になり、Why を投げかけた人から作業をする人までの距離が遠くて、本来のテーマが分からなくなってしまう面もあるんです。あるいは、源流にあった Why にはいい思いが流れていても、何十年も経つと惰性になって最初の意味合いが失われていく。だからこそ、自ら Why を掘り起こすことは大切だと感じます。僕の中では Why と How を明確に分けているのですが、デザインの世界ではどのようにデザインしたか (How) で評価されがちかもしれません。でも、僕はなぜそのプロジェクトがあるのか (Why) にこそ、デザインやプロジェクトの良さの源泉があると思っています。



太刀川英輔 デザインストラテジスト

EISUKE TACHIKAWA / Design Strategist

published_2023.08.30 / photo_tada / text_akiko miyaura

専門性は、ときに自らのデザインの可能性を狭める壁にもなる。

そもそも社会にとって大切な課題やテーマって、それぞれのセクターの専門家は知っていたとしても、デザインの世界ではそれほど語られないんです。本来、みんなが知っていて然るべきなのに。逆に課題を知っている専門家は、その解決法を知らなかったりもします。専門家になってしまうと、クリエイティブなソリューションをする人が極端に減る状況も少なくありません。それは各ポジションの人が自分の領域だけに目がいて、全体像を見られていないことも原因のひとつかもしれません。僕がそれに気づいたのは、独立後の最初のクライアントである東京大学の先端科学技術研究センターの広報の仕事でした。そこで最高峰の研究者の方々と触れあうことも多かったのですが、皆さん、同じ苦悩を語られるんです。「自分の研究の価値を分かってもらえない」って。実際、研究が社会にどう役立つのかを説明してもらうと、話が難しいのも事実なんですよね。

知識やスキルはとても重要ですが、専門性は自分を守る鎧にもなり、ときに自ら囚われてしまうこともある。そう考えると、専門性だけじゃなく、社会を見る目を持つ学際融合が大事だなと感じます。我々も同じでデザイナーがデザインに閉じこめると、デザインのソーシャルインパクトが下がってしまう。つまり、デザインの可能性を狭めるのは、他でもない自分たちだというのが往々にしてあるんですよね。だから、僕はデザインと外とをつなげることを続けています。また、セクター横断できる創造性を伸ばす教育も大切にしています。

工夫することがデザイン。誰もがデザイナーになれる。

「ちゃんと考えて工夫しようよ。」というのが、僕はデザインだと思っています。例えば、適正なコストでつくるカレーでも、ちゃんと工夫すると美味しくなるじゃないですか。しかも、工夫って意外とお金じゃないと思いませんか？ お金を積んで、まずいカレーをつくることもできるわけですから（笑）。それと同じで、世の中のあらゆることは工夫次第でもっと美しく、もっと効率的にできるはず。なのに僕らが使うさまざまなものは残念ながら、考えなしにつくられているもので溢れています。

デザインは、センスや才能を持った人だけの特権的なものではなく、誰でも工夫やアイデアの磨き方は学べる。ある意味、みんながデザイナーになることだってできるわけです。人々の中のデザイン的なマインドや創造性を上げることが、目の前で起こっている社会の課題にタックルする人を増やすことになると思うんです。課題が多いなら、解決する人が多い方が心強いじゃないですか。

危機感が高まったときこそチャンス。絶望する前にやれることをやる。

そう考えると、未来に希望を感じられませんか？ これだけ分かりやすい課題が溢れているということは、解決方法を編み出し放題のボーナスタイムみたいなもの。新しい挑戦をすることで、キミも世界の勇者になれるかもしれない（笑）。そもそも、先進国の日本に生きている我々はラッキーなんです。気候変動の話にしても、豊かな環境であれば何とか適応できる可能性が高まるし、新しいことに挑戦する余裕もありますから。

結局、まだ起こっていないことに絶望するより、今のうちにやれることを何でもやっておいたほうがいい。まさにあり得ないほどの猛暑を体感して危機感が高まっている今は、チャンスだとも思うんです。気づきさえすれば、そこからの変化は早い。自然選択の進化論でいうと、生き残ったものが適応した個体です。持続不可能な世界の後に文明が残らなかったら、そのタイミングで「自然選択がかかった」ということになってますが、それじゃ遅い。僕らはこれからの気候や生態系への人類の適応を、自分たちでなるべく先読みしなきゃならない。こうした大きなテーマの中に、間違いなく次のデザインのメインテーマがあるし、何が正解かはわからない。無数のトライから生まれてくる可能性が、これからの希望になるんだと思います。

撮影場所：AXIS内JIDA デザインミュージアム

取材を終えて……

生物の進化構造を元にした太刀川さんの「進化思考」は、明解で説得力のあるお話でした。視点が多角的であることは一つの才能ですが、太刀川さんと話していると多角的どころか、どこに死角があるのだらうと思うほど、すべてを見渡しているように感じます。これだけ精力的に動きながら、常にあらたな分析（＝解剖的視点）を通してさまざまなインプットをされていることにも驚かされるばかり。さらに、その膨大なインプットを超高速の電子回線のごとく、つないでいく様は圧巻でした。深く知り、思考し、工夫しながら美しくつなげ、循環させ、回復させる。そのデザインの手法に、未来の希望を見た気がします。（text_akiko miyaura）